

名水の郷白州を舞台に農業と教育と地域を繋ぐ活動が続けられて20年以上の歳月が経つ。

子どもの頃からこの活動に参加してもらい、成長と共に地域や農業、環境といった問題に興味を持つようになり、自分はどう生きていきたいのか、人生の目標をどこに、また何に見出すか、考えた末に白州で農業をやっている。いや、考えたと言えは響きが悪すぎて、実際の所は一步踏み出す度胸がなかっただけなのだが…きっかけは、6年間の学生生活の中で、農業に携わる人生を歩んでいくつもりだと担当教授に伝えた時、「どんなに優れた文章を書く研究者よりも君の生き様を尊敬する」と激励の言葉を頂戴し、父からは「生涯現役でいられる生業を選択した息子が羨ましい」と背中を押されたこと、この2点しかない。しかし、絶えず人生の傍らに白州を置いてきた自分にとってはそんなに大袈裟なことではないので、今でも恐縮しています。

そんな自分の目標は、キララに参加した子ども達が、将来職業を選択する際に、選択肢の一つに農業に魅力を持てるようにすること。また、自分が子どもの頃面倒をみてくれた諸先輩方が、彼らの子どもを白州に参加させたいと思えるような環境を作り出すこと。そのためには自分が「どん百姓」であることが何よりも重要であるように思います。また、もう少し農業に自信が持てるようになったら、教育についても真剣に取り組んでいこうと思います。

10年先、20年先、自分が面倒をみた子ども達が、ひょっこりミニサイズの彼らを連れて遊びに来られるような、そんな環境作りを目指して頑張っていますので、何卒ご指導並びに応援の程をよろしくお願いします。



編集後記

東京中野の都会育ちだった大谷理伸君が夏から白州の農業研修生として働いていて、ブログにおもしろい研修生日記を書いています。白州のホームページ (<http://www.hakusyu.jp/>) からご覧ください。白州郷牧場の日常がよくわかると評判です。

さて、かつて農村の退屈さや閉鎖性に嫌気がさして都会に光をみた若者が、今はむしろ逆に、都市に閉塞感を感じ地方に対して希望を見出しているのでしょうか？

わたしの家から白州郷牧場の研修センターへ行く途中に甲斐駒ヶ岳神社の分社、前殿があります。一般に社があるのはだいたい農地や集落の終点で、そこまでは人間の領域で、そこから先は異界になるからだといわれます。異界とは、いってみれば神や鬼の領域です。祭りや神事は社で行われます。また墓地も山という異界に向かう入り口に多く位置しています。この世とあの世、生者と死者、日常の労働と非日常の祝祭が交流する地点に、社や墓が造られているわけです。駒ヶ岳神社の分社が建てられた頃、白州横手のこの位置はおそらくそんな俗なる労働の農地と、聖なる神の領域である駒ヶ岳を分かつ地点だったのでしょう（現在は日常の領域が山々を浸食し、横手でも立派な野菜たちを日々生産しているわけです）。

東アジア古来の律令制を持ち出さなくても、農村とは長い間、

本を読んでみよう！

「いまこの国で大人になるということ」
荻谷剛彦
紀伊国屋書店



大人の定義とはなんだろう。就社（私の場合は、就職ではない…と誰かに言われた）から、はや2年半がたった。

会社でひがな一日パソコンに向かい、営業職でもないので成果も目にみえず、まるでみんなのお母さんのような存在（初々しいのは入社半年までらしい）となりつつある25才の私である。

私じゃなくちゃだめなことなんて、何にもないのであり、誰かは誰かの代わりになりうることが働いて得たことだ。そして、自分でなくてはだめだと強く思っている人ほど、サラリーマンの中ではいわゆる成功者に近づけるのだ（これってホントに幻想だけ）。

別に日常に不満があるわけではなく、むしろ恵まれていていると感じることも多いのだけれど、時々やってくるむなしさにはどう対処したらいいのかいまだわからない。

そんな時に会ったのがこの本だ。仕事をするというのは、「ワケわからん」ことの連続である。ワケわからんうちでそれなりになんとかすること。それが大人の仕事である。

そして、学生のうちに「ワケわからん」に対するタフネスを身につけること、これが一番大切な基礎である。

そうなんだ！この言葉、学生の自分に聞かせてあげたかった。高校生、大学生のキララスタッフに読んでみてもらいたい。あと進路に迷っているおとなにも。
中野 歳子

正規の労働者＝納税者＝良民と規定された人々の労働空間、まっとうにして俗なる日常生活の場でした。

対して都市は特殊な異界でした。良民たちが農地で日々築きあげた営々たる労働の成果を巻き上げては蕩尽する収奪空間であり、富と欲望が交錯する魔界だったわけです。そんな輝く空間に魅入られて野心的な若者たちが群がり、奪い合い、莫大な利潤で都市は膨張し、人々を飲み込んでいきました。そして現在は都市すら俗なる労働の場、空虚で変わり映えのしない日常空間に転落し、農村にいたっては死を待つ老人たちの荒野だといわれます。

輝ける異界はどこにいったのでしょうか？実体の知れない電子ネットワークの中でしょうか？いいえ、人間社会の変遷などお構いなしにずっと超越した地点に存在していたのは、やはり山や森でした（と、こんなひとことで簡単に片付けてしまうのは不遜です）。

かつて若者は別世界の燦めきに幻惑されて魔法にかかったように都市に集中していきましたが、わたしは研修生の大谷君も、同じように異界・魔界に魅入られて、知らずにはここ白州に辿り着いてしまった悩める若者かもしれないと思ったりするのです。

井上忠彦



きらら新聞 32



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそしむ」

2006年
10月30日

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北州市白州町横手 2259
白州郷牧場内
TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

かつて見ない内面的孤独化…

友

人から聞いたのだが、作家・藤本義一が、殺人や重大暴力事件を起こした少年の家を訪れて共通に分かったことは家に仏壇が無いことであつた、と述べているらしい。核家族化して以降、仏壇のない家庭はめずらしいわけではなさだろうから、仏壇の有無が他者を容赦なく傷つける行為と関係していると、短絡的に結びつけるわけにはいきまい。藤本は仏壇の有無そのものより、「死」にまつわることが日常生活の中で希薄になって来ていることに注意したいと思つたのだろう。もちろん、朝晩に仏壇に向かう祖父母の姿や、死者に伴う様々な儀礼や慣行への参加、さらには死んだ身内のことをいろいろ聞かされる機会が失われたことで、他者を傷つけることを躊躇する心性を自然に育む環境も失われていった側面はあるのだろう。

私は3代目のクリスチャンで、祖父母の代から家に仏壇はないし、母方の祖父母の家にも仏壇はなかった。妻も2代目クリスチャンで、実家に仏壇はなかった。ただ、妻の父親は商家の生まれで、若くしてクリスチャンになり、専門分野もキリスト教史、晩年はキリスト教主義学校の学長・院長などもやったのだが、生家で身についた様々な日本の日常的儀礼というか慣行にそった生活をする面もあつた。私の家ではどうてい考えられないものもあつたが、私は反発どころか、その「アンバランス」さが非常に心地よかった。

それはともかく、日本のキリスト教人口が国民総数の1%から一貫して増えない大きな原因には「死者の扱い」にあると、最近話題になった書物『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（米国人宣教師マーク・マリンス著 2005年刊）

で書かれている。マリンスは「日本には近代化、都市化が進むにもかかわらず祖先、霊界信仰が存在しているが、日本に移植された西欧キリスト教は、そのような在来の多様な伝統を排除し、キリスト教を信じずに死んだ者には希望がないとした。その結果、祖先の救いに関して何の希望もなく、祖先への敬意の表明を禁じるキリスト教は、死者を顧みない反家族的宗教であり、日本人の宗教心からは程遠いものであつた」と断言している。そして、日本に土着化したキリスト教（メイド・イン・ジャパンのキリスト教）はことごとく、仏壇に代わるキリスト教式家庭祭壇を置くことを奨励したり、霊界にいる人々を救済するという聖書解釈などを通して、死者に対する数々の儀礼・慣行を翻案して組み込んでいる、という。その指摘はほとんど正しいだろう。しかし、だからといって西欧キリスト教の流れを受け継いでいる日本の多くのキリスト教信者の家庭の少年のほうが、殺人や重大暴力事件を起こす割合が高いとも思えない。

宗教改革の帰結の一つは、呪術からの解放が、秘蹟や聖人という慰めの源泉を失い、自分の運命に個々人が責任を担う「かつて見ない内面的孤独化」であつた、とマックス・ウェーバーは指摘をしている。この「かつて見ない内面的孤独化」が、仏壇の有無や宗教改革の帰結であるということを遙かに超えた、もっと大きな流れの中で加速しているといえるだろう。われわれは何をなすべきなのだろうか。内面的孤独化を救う道程が他者を抹殺することまでに突き進んだオウム事件を思うと、思いは複雑にならざるを得ないのだが…。

秋山眞兄



今年は旧暦で見ると閏年となるようで秋が長いのだそうです。そのせいか暖かで穏やかな秋の日が続いています。稲刈りも終え黄金色の稲穂がすっかり無くなると辺りの田は一齐に寂しい風景を作り出します。



何日か雨模様の日々が続き、厚い雲が山々をすっぽりと覆いつくしていると、ある日突然雲が晴れ山は色とりどりの色彩を青空に輝やかせます。まるで山が紅葉を美しくなるまでじっと隠していたかのように思われます。紅葉は上から段々に降りてきて全山紅葉となるのはもう少し寒くなってからになるでしょう。

Hakusyu Oct.2006

この秋も椎茸が出してきました。この数年毎年春の学校で子ども達と種菌の作業をやりホダ木を増やしています。収穫はいつも猿達と競争ですが負けたり勝ったりという戦況です。悔しいことに猿たちは椎茸の軸しか食べず傘をホッタラカして置き、それを私たち人間が拾って食べるのです。



今年は栗があまり沢山実りませんでした。いつものように庭中房状の栗の花でいっぱいになることもなかったし、屋根に栗の実が落ちて当たる音も少なかったようです。それでも落ちる栗の実を今年は拾いもせず掃き集めておいたら、ある朝、猿が栗の実を食べて散らかしていました。



白菜と大根の収穫が始まりました。農場のスタッフは年々野菜づくりが上達しています。立派な大根と白菜になりました。

冬越ほうれん草の種蒔きも始まっています。寒い冬を畑で越し土中の栄養素を沢山含んだ甘いほうれん草を春一番に収穫するつもりなのですが、ひょっとしたらこの年末にもう大きくなっているかもしれません。まだまだ種蒔きは続きます。



加工所では漬物の作業が始まっています。まだ量は多くありませんが白菜の刻み漬、大根の葉の醤油漬、紫蘇の実の漬物など作り始めています。これから白菜の漬物、大根の麹漬や酢漬けなどの本格的な漬け込みの季節となります。